

麻雀放浪記

—— 映画文学人生論

原作：阿佐田哲也 (1969) 「週刊大衆」
監督：和田勉 (1984) 脚本：和田勉 澤井晋一郎
出演：坊や哲 真田広之 撮影：安藤庄平
ドサ健 鹿賀丈史 音楽：高桑忠男 石川光
出目徳 高品格 ママ 加賀まりこ
女衞の達 加藤健一 まゆみ 大竹しのぶ

チンチロ部落で勝った中学生はお前がはじめてだよ

和田勉監督の映画『麻雀放浪記』は面白い、観ているうちに自分も登場人物になり、サイコロでも牌でもなんでももってこいという気分になる。もちろん阿佐田哲也の原作が面白いせいだが、この映画は主な登場人物がはまり役で、演技が真に迫っている。

真田広之の坊や哲、鹿賀丈史のドサ健、高品格の出目徳、加藤健一の女衞（ぜげん）の達の四人がかこむ麻雀のシーンは芸術といってもよいと思う。麻雀の映画が芸術になるとは驚いた。

昭和二十年の秋、中学生の制服を着たままの坊や哲は上野で上州虎（名古屋章）と再会し、チンチロ部落に連れていってもらう。そこではサイコロを使ったチンチロリンの賭場が開かれていた。

坊や哲はそこで隣り合わせたドサ健のコーチを受けながら、小銭を儲け、「チンチロ部落で勝った中学生はお前がはじめてだよ」と言われる。気をよくした彼は博打で生きていく決心をした。

昔風にいえば、渡世人になるということだが、親分子分の盃をかわしてやくざの仲間入りをするつもりはない。あくまでも自分ひとりの力で麻雀の技をみがき、一匹狼で生きていこうとした。

しかし、それは不可能に挑戦する修羅の道だ。ドサ健はチンチロリンの勝ち方を教えた代償に儲けの三分二を要求した。そして、銀座で進駐軍の



麻雀放浪記

映画文学人生論

アメリカ兵士と麻雀をした時、ドサ健は勝ち逃げをする。坊や哲は自分が負けた分の支払をドサ健が肩代わりしてくれなかったので、滅茶苦茶に殴られた。博打の仲間からは友情は期待できない。

麻雀の世界ではいかさまを働く玄人がいる。積込みで二の二の天和という大技を得意とする出目徳はそんな玄人の一人で、バイニンさんと呼ばれている。女衞の達は麻雀の腕は少し劣るが、女の売買斡旋という本職では凄腕を發揮する。

こんな連中を相手にしながら坊や哲は終戦後の混乱期を一匹狼として生きのびた。信じられないような話だが、彼はサバイバルのために脳みそをふりしぼり、独自の哲学をあみだしていく。

彼は玄人の神髄に触れるばかりにのめりこむ生き方以外には興味がなかった、しかし、そう思うこと自体が、彼がまだ本格的な麻雀打ちになっっていなかったと反省しはじめる。

やがて、彼はたかが玄人と思うようになった。もっと大きな、総合的な生き方がある——そんな発想をするレベルにまで成長する。

麻雀小説で売り出した阿佐田哲也はやがて色川武大という別名で『結婚』により直木賞を受賞した。『私の旧約聖書』という著書もある。六十二歳で亡くなったが、徹夜麻雀で不摂生な暮らしを続けたわりには長生きをしたともいえる。

焼跡の小屋に松虫チンチロリン